The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フランス・パリのタペストリー(織物)の学校と留学生受け入れ事情について
Author(s)	松田, 真平
Citation	デザイン理論. 1999, 38, p. 86-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52980
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フランス・パリのタペストリー（織物）の学校と留学生受け入れ事情について

松田真平／（株）ICD 現代デザイン研究所

私は，1989年１月から1993年12月までの約５年間，フランスのパリで，織物に関する技術や，Création（創造）について学ぶ機会がありました。今日は，その時に学んだことや，日本との教育のちがい，個人主義の社会での教師と生徒の距離感覚といったようなテーマで，お話させていただきたいと思います。発表に先立ち，この発表のチャンスを与えて頂き，原稿のまとめかたについても懇切にご指導いただきました宮島久雄先生に感謝申し上げます。

これからご紹介いたしますのは，次の２つの教育機関についてです。

1．フランス国営ゴブラン織工房
（Mobilier national et des Manufactures nationales des Gobelins et de Beauvais）
所在地：42, Av. des Gobelins 75013
Paris　メトロ７番線　Les Gobelins

2．パリ市立デュペレ装飾美術学校
（Ecole Supérieure des Arts Appliqué Duperré）
所在地：11, rue Dupetit Thouars 75003
Paris　メトロ３番線　Temple

●ゴブラン織工房について

ゴブラン織工房での留学生研修制度は1978年頃に発足。これはゴブランの竪機（たてばた：Haute lisse）によるつづれ織の技術を広く開放して，外国人に研修してもらうための機関で，最低３ケ月，最高1年間研修できます。授業料は1989年当時で１ケ月500フラン（糸代を含む）で，ゴブランでは常時10人迄留学生を受け入れていました。私は約６ケ月間勉強しましたが，入学の交渉で有効なのは，まず手紙などであらかじめ来意を告げておき，手紙が着いた頃に，直接にゴブランへ行って，先生に会ってみることだと思います。

私の場合は，まずデュペレのタペストリーのアトリエへ直接出かけて行って，その先生にゴブラン織工房の留学生研修制度について教えてもらい，ゴブラン宛の手紙を翌日作成してそれを持ってすぐにゴブランへ出かけました。構内を歩いていたフランス人のおじさんに声をかけると研修者のためのアトリエへすぐ連れて行ってくれました。あとで，そのおじさんが，ゴブランの最高責任者のポステル氏だとわかって驚きましたが，意思さえ通じれば，国籍も社会的身分の差別なく，皆が平等に話し合えるフランス人気質のすばらしさも感じました。

ゴブラン織工房の敷地は広大で，一般に公開している建物は全体のごく一部で，職員の宿舎もあるようです。静かでのどかな構内は，時間がゆっくり流れ，パリではないような印象すらあります。

ゴブラン織の緯糸（よこいと）はすべて毛糸（laine）で，公共機関のホールなどのための大型の織物が何年もかけて手作業で織りあげられて行きます。タペストリーの世界の今世紀フランス最大の巨匠「ジャン・リュルサ」の作品もたくさんここで織られました。

最近は財政難で，留学生の授業料も高騰。クレッソン首相の時には，ゴブランをすべてオービュソンという小さな町（リモージュの近く）へ移す計画もありましたが，反対署名

などの市民運動もあって，その計画はとりやめになりました。

ゴブラン工房はパリだけでなく，パリ北郊のボーヴェにも分室があり，ここでは経機（よこばた）Basse lisse なども多く使われてじゅうたんなどが織られているそうです。

●デュペレ装飾美術学校について

グランゼコル（最高学府）へ入学する前段階の専門教育を高校卒業者（年齢18〜21前後）に施す機関で，パリでは他にメチエダール（Métier d'art／15区の rue olivier de serres にある）や，Boule, Estienne, などがあり，専門領域が少しずつ異なります。

デュペレはファッションが一番有名ですが，刺繍，タペストリー，陶芸などの部門で，留学生研修が受け付けられています。入学は，教授との面談によりますが，個人主義ですので，校風があわなくて，途中で退学を余儀なくされてしまう場合もあります。

一般に，留学生が入学できる受け皿は Centre Artisanale といって，3年間の過程を終えれば，Diplôme（卒業証書）がもらえるシステムになっています。授業料は無料，学生保険を年150F前後払い込み，昼の給食回数券（1食150円くらい）も買うように勧められます。

デュペレでのタペストリーの制作は，ゴブランとは異なり，糸でレリーフを彫刻するような発想で，創造性をきわめて重視しています。課題は与えられず，自分でこんな作品を作りたいと教授にエスキースを見せ，何度も何度も直されて，だんだん作品の構想がまとまってゆくような感じです。

私はジャン・リュルサが好きなのですが，私が3年間習った Janine Avramidis 先生に「リュルサはもう終わったのですよ」と最初に言われたことは，今も耳に残っています。

教授その人の芸術的感性や好みが，そのアトリエの生徒の作品に大きく反映されていまして，できてくる作品の現代性は，先生と生徒との会話の中から形になってきます。

「きみのエスキースのこの形は根拠がないからだめだ。」とか「この色はわたしはきらいだから，直しなさい」とか「立体的表現をするとき，色数をセーブしなさい」とか言われるわけですが，その説明が極めて的確で，それでいてその作者の個性をうまくひきだしてくれるような指導でした。

もちろん生徒もいわれるままではなく，自分がなにを表現したいかをはっきり説明して，先生と対話をすすめていくのですが。

伝統的な授業方法の現代化は，たとえばコンピューターの導入など，日本とそう大差はないと思います。（もっとも私はフランスでコンピュータの授業をうける機会はありませんでしたが）。しかし，個性的なアイデアを重視する傾向の強さと，それを芸術的に“美しく”まとめあげる指導力のレベルの高さなどは，フランスらしい本当にすばらしい点だと思います。

半立体的なタペストリーの構想をまとめる段階で，粘土でマケット（ミニチュア模型）をつくることも多く，これはたぶん日本ではあまり試みられていない方法ではないでしょうか。

デュペレの生徒によるファッションショーは年1回おこなわれますが，実にユニークで CRÉATION（創造）の国フランスの面目躍如といった印象の大イベントです。

対外的には学園祭 Porte Ouverte や卒展があり，教室の内部や生徒の作品をみることができます。また，パリ15区のメトロ Porte-de-versailles の広大な見本市会場（Parc des Expositions）で，デュペレの学校をアピールする展示がなされたこともあります。